

Attention

この文章は Axis Powers Hetalia の女性向け二次創作であり、読者を選ぶ内容となっております。

この話は原作及び現実存在する国・団体他ありとあらゆるものと無関係であり、誹謗中傷の意図は全くございません。公共の場や一般の方の目に触れないところで個人的にお楽しみください。

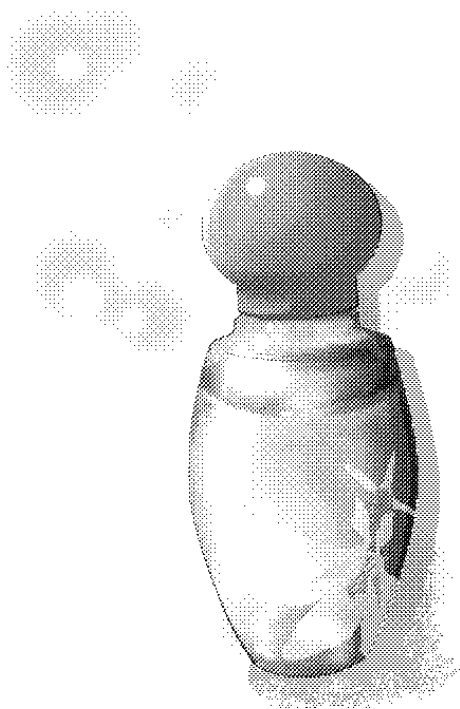
又、下記の注意事項を全て許容できる方のみ、先へとお進み下さい。
読み進めて不快な思いをなされても、当方は一切の責任を負いません。

- キャラクターは人名表記になります。
- フランシス×アーサーですが、話の進行上、フランシスがアントーニョに惚れている部分があります。
- 本書の情報は鵜呑みにせず、話半分程度にお読みください。

以上が許容できない、理解できない場合、恐れ入りますがページを閉じ、速やかに破棄して下さりますよう、お願い申し上げます。

L'Oiseau bleu

青い鳥



Prologue

Side. A

愛する人を幸せにしたいと思うのは、当然だろう？

目の前で揺れるハニーブロンドの髪が、薄暗い店の光を反射している。

空になったグラスを傾ける手が、どこか少し気だるげな表情とあいまって、憎らしいほどに様になっていた。中身の変態さがにじみ出ていなければ、見目だけはよろしいのだ。非常に不本意だが。

しかしそのご自慢の面も、今日は平時よりも陰って見える。落ち着いた青菫色の瞳が、今日は何処か精彩を欠いていた。

どうやら隣の髭面の男、フランシスは弱っているようだ。もっとも、俺以外はきつと気付けなかっただろう。他の

奴らの前では努めて平然さを装って、しまりのない顔でへらへらと笑っていたから。

だが残念なことに、俺は気付いてしまった。

今日、コイツをこうして飲みに誘ったのは一応の目的があったからだ。慰めようとか、そんなものではなかった。

けれど、この調子では俺の目的を達成することは難しいだろう。ともかくにも、少しぐらい浮上させないと言いだしてくいのだ。弱つているところにつけるような真似は——まあいつもなら余裕でできるのだが、今日は控えておきたかった。

「……随分辛気臭い顔してんな？」

「んー……」

「プレイベートか、仕事か？」

悩んでいるのか、とは言わなかったが、なくとも十分だった。フランシスは少し目を泳がせ、いつもよりも皮肉さが幾分か間引かれた笑顔でへらりと笑う。

「個人的なこと。愛がねえ、うまくいかなくて」

「なんだ、恋愛関係か」

舌打ちをして見せる俺に、ちよつと坊ちゃんひどい！と髭はくつてかかる。

俺としてはひどいのはお前の方だ、よりにもよって今日そんな悩みを抱えてきやがって、と罵りたい気持ちだった。しかしそれは完全な言いがかりなのも重々承知していたので、しかたなしに飲み込んでやる。

「もー、こっちは真剣に悩んでいるのに……」

フランスはぶちぶちとこぼしながら口を尖らせ、グラスの中の氷をくるくる回してみせる。その姿が哀れっぽくも少し可愛い、と思つてしまったせいかな、俺は「自称愛の国が悩むなんて珍しいじゃねえか。恋人とうまくいつてねえのか？」と悩みの先を打ち明けるように促してしまった。

口に出してからしくじつた、深入りするべきではなかったかもしれないと思つたが、出してしまったものは仕方ない。どうせ俺の今日の目的は、こんな状態の髭相手では達成できないだろうから、たまにはこんなしおらしい髭の相談に乗つてやるのも悪くはないだろう。

髭面なのに何だか可愛いらしくなつてしまった隣人は、んー、と唸つた後、ためらいがちながらも口を開いた。

「いや、もーすっごい片思いなんだよね」

「片思い？」

「そろそろ3か月くらいかなー。最初はいいやつだなあつて思つてただけ、だつたんだけどさ。段々、ああこれ好きだわつて思うようになってきてな」

3カ月の片思い。それは、この隣人にしては随分と長いように思えた。

愛に対し積極的かつ情熱的なこの男は、大体好きだと思つたら即行動に移し、果敢なアタックと経験による手管で一月もしないうちに相手をいとめてしまう。相手が老若男女誰であろうとも、だ。コイツはそう言う恋愛沙汰の駆け引きが本当に上手い。以前フランス自身、相手が恋愛で何を望んでいるのかは相手を愛していれば大体分かる、と

自慢げに語つていたくらいだ。そして、それが決して誇張表現ではないことぐらい、コイツの隣でその恋愛遍歴とやらをみていればおのずと分かるものだ。

それでも、コイツに落ちないやつも稀にはいる。そう言つた相手に対しては、フランスは深追いしないのが常だ。ある程度アタックして見込みがないと知ると、深入りはせずにさつとそこで引いてしまう所がある。そうして、すっぱりと相手と二度と会わない。好きな人にしつこくして嫌われるよりは、あきらめられるうちに離れる方がいいですよ——、そんなのが俺の知るフランスだった。

しかし、今回は3カ月も片思いをしているらしい。口ぶりから言うともあまりうまくはいつていないようだが、いつもならとつくに見切りをつけているくらいの時間だ。

「片思いねえ。いつもみたいに、鬱陶しいくらい嘘くさく愛してるアピールしてないのか？」

「鬱陶しいって何!? あと俺の愛はいつだつて誠実です! 嘘くさくありません!! ……いやね、もうお前に隠してもしようがないからいつちゃうけどさ、相手、アントンなのよ」

「……アントーニョ？」

一瞬、息が止まりそうになつたのをごまかすように、名前をつぶやく。

頷くフランスの目は冗談を言っているような色合いではない。

アントーニョ、それは俺たちと同じ『国』で、フランス

の隣国の一つである男の名だ。

「そう、いまさらアントンなのよ」

ずつと隣だったのにねえ、と自嘲気味に笑う声が、何処か遠くに聞こえた。けれど、『ずつと隣だった』、その言葉の威力だけは信じられないほどの鋭利さで俺の心に斬り込んできた。

フランシスに見えないような拳を握りしめ、やり場のない想いを少し発散させる。

隣の男は幸いなことに俺の方へは視線を向けないまま、ぼつぼつと言葉を続けた。

「三か月ちよつと前にさ、俺、結構長く続いていた恋人と別れたんだよね。普通の子だったし、俺が『何』か打ち明けられるような相手じゃなかったから仕方なかったんだけど。相手の子も俺が隠し事してるとってことは気付いてたらしくて、終わりの方はなんかすぐすれ違つてさ。随分前からそろそろ潮時だつてわかつてたんだけど、なんか離れがたくつてたらなら恋人関係続けてたら、結構ひどい別れ方になつちやつたんだよね」

それは、目の前の男にしては珍しいことだ。なんだかんだ言つてコイツは要領もいいし、何よりも傷つくこと、傷つけることを恐れる。それを臆病というのか、優しさというのかは俺には分からないが、少なくとも関係をこじらせて別れる、というのはあまりなかった。想像でしかないが、その時のフランシスはかなり傷ついていただろう。

「その時にさ、ふつと思つちやつたんだ。ああ、俺はこ

やつてこれから先もずつと、好きな人とわかりあえないのかな、寄り添い歩いていくことはできないのかな、つて」ああ、それは相手が人であり、自分たちが国である以上仕方のないことだ。

俺たちと彼らはあまりにもそっくりで、でも根本が絶望的に違いすぎる。どんなに親しくなれども、譲れない一線、ふさぎきれない溝が両者の間にはあるのだ。

「そんな時、慰めてくれたのがアントンだったんだよね。親分が胸を貸したげるから存分にお泣きうなんてさ、他にも色々優しい言葉なんかかけてもらつて。ふつと顔をあげたら、そこに笑顔のアントンがいて。……なんだか、ああ、こいつみたいなのがずつと隣にいてくれたら、すごい幸せなんじゃないかな、つて思えて」

そしたらなんか、だんだん、ね？ と男のくせに小首をかしげる姿になる男は、小さく笑つた。その表情は、見ているこちらにも心臓をわしづかみにされるような切なさ滲んでいる。

俺は色々とその顔に思うところがあつたが、
「……弱つてるところを優しくされて好きになるとか単純だなお前」

結局、口に出すことができたのは、いつも通りの皮肉だった。

「お前は弱つてるやつにも辛辣だな！」

「というか、人だどずつと一緒にいれないって思つたら、即相手を国にチェンジするとか単純すぎるだろ」

「ひつど！ お前ひつど！ それは俺も思わないでもないけどしようがないじゃん好きになっちゃったんだから!!」

ぎゃんぎゃんと叫ぶ髭は、言葉こそいつも通りの軽い口調だったが、顔はどこか泣き出しそうに見える。

「俺だって考えたんだよ？ いやいや、そんなにくらなんでも単純すぎるだろうって。でもさ、アントンの顔見るたびに、ああこいつが恋人だったら隠し事も必要ないし、長く一緒にいられるし、素敵だなあって思いだしたらなんか止まらなくなつてさ。けど、相手はずっと隣にいた悪友だし、アイツがロヴィーノのこと好きなのなんてわかつてるし、俺にそういう感情持てないの知ってるしね。今さら、俺お前なこと好きになっちゃった付き合つて！ なぁんて言つたって無理だなあって思つたら、告白なんてそれこそできるわけないだろ」

その吐露は、端々に既視感を覚えずにはいられない感情の羅列だった。

ずっと隣にいたのだ、だからこそ言えるわけがない。口にすれば、壊れてしまう何かがある。それを恐れるあまり言葉はいつも口汚く相手をののしるばかりで。

でも、それでも。

「でも、それでも、いつもみたいに諦められなかったんだよね。隣国だしEUだし、会わないって選択肢が無い分、ふつきれなくて……」

ああ、そうか、同じなんだコイツも。

そう思つたら、切なさ以上になぜか親近感が湧いてきて

しまった。自称愛の国だろうとなんだろうと、同じ境遇なら迷うのだなと思つたら、少しすつとしてしまったというか、共感してしまつたというか。あるいは自分の方がその「境遇」の先輩として長い分、妙な優越感を感じてしまつたのかもしれない。

少し項垂れた腐れ縁の後頭部を、ぼんぼんと叩いてやる。「そうだな、しようがないよな。好きになつちまつたんだから」

「……？」

何ともしようがないのだ、愛してしまつたものは。嫌いになろうとしてなれるものじゃないことは、俺が一番よく知っている。

ただ無性に、俺はフランシスに優しくしてやりたくなつてしまつた。酔いも手伝つて、今なら不思議とそれができるような気がした。……こいつが女と分かれて凹んでいた時に、そうしてやつたというアントーニョのように。

不思議そうに顔を上げた男の頭をそのまま撫でてやりながら、つとめてゆつくりと言葉を紡ぐ。あいにく誰かのようになんか安心させるような笑顔なんざ浮かべられないが、それでも。

「いいんじゃないか？ 無理に諦めなくなつて。そう言うのは理屈でどうでもいいもんじゃねえしな。大体、愛の国を自称しているお前がそんな弱気でどうすんだよ？ 今までの恋愛とは違うかもしれないけど、何もしないであきらめるよりは、ちよつとは頑張つてみたらどうだ？」

まるで自分じゃないみたいに、励ましの言葉がするすると出てくる。ああ、俺がコイツ相手に慰め叱咤激励してやるだなんて！ 頭の中の何処か冷静な部分が、その事実には自嘲と失笑をしているような気がする。

普段なら俺からのアドバイスなんて一笑に付されるだろうが、この言葉はフランシスの心に届く、そんな気がする。同じ境遇だった俺が、何よりも欲しかった言葉なのだから、間違いない。

「ライバルがいる？ 今さらだ？ 愛の国が目の前の愛に怖気づいてどうすんだよ。……口にしてやんのも憎たらしいが、お前黙っていいや顔だつて良いし、料理だとか取り柄が色々あんだろ？ アントーニョごとき振り向かせんなんかわけねえよ」

呆けたように目をぱしぱしと瞬かせる男の背を、少し強めに叩いてやる。

フランシスは叩かれた部分を痛そうにさすりつつ、ようやくいつものようなへらりとした笑みを浮かべた。

「何、坊ちゃん。褒めてくれるとか珍しすぎない？ 熱でもあるの？」

「うっせえ。お前が珍しく殊勝だから、俺も特別にしてやったんだよ。お望みならその湿気た顔面に、一発活入れてやってもいいぜ？」

これ見よがしにバキバキと指を鳴らして見せると、フランシスはわざとらしくタンマ、それなし！ と両手を前に交差させて後ずさった。どうやら大分調子が出てきたらし

い。

ふっと俺が笑うと、フランシスもわずかに笑った。

「一応礼は言っておくよ、坊ちゃん」

「この貸しはでかいぜ？」

「やだもうコイツつてば、ちよつとこつちが下手にですとすぐこれだ！」

頭を振る男に、先ほどのまでの矍りはない。そうだ、この男はいつもこうでなければ。不遜で、変態で、やたらと美と愛に自信満々な馬鹿。それこそがフランシスだ。

「ま、ちよつと俺も頑張ってみることにするさ。そうだよな、あきらめたらそこでお終いだもんな。お兄さんとしたことが愛に憶病になるなんて！」

そう言つて視線を上げる男の眼は、既に小さな星光が瞬いて見えた。新しい希望に満ち溢れているその目に、もう俺が映っていないことだけが、すこし残念だった。

ああ、今日はもう、目的など達成できそうにない。そしてきつと、この先も当分、成し遂げることはできないだろう。それが分かってしまうとやる瀬無いが、仕方がないことだ。むしろ行動に起こす前にそれが無駄になると分かつてよかつたじゃないか。

ふと、内ポケットに手をやる。かきりとした紙封筒の感触は、今日コイツを飲みに誘つた理由だ。けれど俺にはもう無為になってしまった。ああ、それなら。

「貸しついでに、もう一つ」

言いながら髭に向かって小さくたたまれ、少しよれてし

まった封筒をポケットから差し出した。

「へ？」

「哀れな髭に、特別にタダでくれてやるよ」

「何？」

緩慢な動きで封筒を受け取った男は、恐る恐る中を覗きこみ、ゆっくりと中身を取り出す。

「アントーニョを誘うきっかけくらいにはなるだろ」

封筒の中身はサッカーの公式試合のチケットが2枚。イングランドVSスペイン戦、それもVIPの特等席ともなれば、サッカー好きのアントーニョが断るはずもない。

フランスはチケットの内容を見て、「うっそマジで？くれんのタダで？」と俺に何度も何度も確認し、そして。

ぶわりと、その端正な顔を喜色一面に彩りながら、俺に振り返った。

「メルシー！アーサー！」

その時のフランスの顔を、俺はこの先一生忘れないだろう。

そして、この瞬間に俺は、目的が永久にかなわないことを悟り。

——新たな別の目標を抱いたのだった。

1. Side. A

「……それで、渡してしまっただけですか？」

目の前の、大切な友人の眉間に、大きな大きな皺が寄る。滅多なことでは怒らない……いや、怒りを表に出さない遠い東の友人は、その分怒ると恐ろしく、酷く辛辣で手厳しい一面がある。しかし彼の怒りを甘んじて受け入れる必要があつた。面目なきでいっばいになりながらも、それでもアドバイスをくれた相手に事の次第を報告しないわけにはいかないのだから。

だからこうして、不快指数が高く、バカンスにはあまり向かないと言われる夏の日本にわざわざやってきた。菊の家は典型的な日本家で、冷房は備え付けてあるもののはほとんど稼働していないので、熱さが苦手な俺には目が傾いた今の時間帯でもきつかったが。

俺が肯定の意を示すと、怒りではなく呆れの方が強かったのか、菊はひと際大きなため息をついてしまった。

その姿に、さらに申し訳なさがあふれ、思わず彼の国で最上級の謝罪であるというドゲザをしてしまいたくなる。幸いなことに今は菊の自宅、居間とよばれるその場所ので、おあつたえ向きに畳の上だったのだ。

俺が畳の上に手をついてつたないドゲザを披露する前に、菊は眉間のしわを手で押さえながらゆっくりと俺に問いかけた。

「私が助言したのはフランシスさんを誘う方法であつて、フランシスさんが別の人をデートに誘うお手伝いをする方法ではなかったはずなんです？」

「……その、すまない」

菊はもう一度ため息をつき、そして悲しそうな表情を露わにした。

「何処の世界に、想い人が別の人と結ばれるよう手助けをしてしまう人がいますか？」

「この世界に、なんて軽口をたたけるような雰囲気では到底ない。俺は菊の助言を、彼の意図した意味では全て無駄にしてしまったも同然なのだから。」

俺はフランシスに恋をしていた。

ずっと前から長いこと、馬鹿みたいに未練たらしくずるずると。けれど行動に起こすことをためらい、恐れ続け、何もできなかった俺は、たまに菊に相談とか心情的吐露に付き合ってもらっていたのだ。アイツが俺を好きになつてくれるはずがない、でもあきらめきれない、けれど今の関係を壊すのが一番怖い、アイツのそばにいたい——。

ぐだぐだと同じところを堂々巡りする俺の愚かな告白を、菊は辛抱強くいつも最後まで聞いてくれて、そして優しく励まし、つい先日は背中を押してくれた。

『今の関係を壊すのが怖いなら、少しずつ変えていけばいい』

いのです。昔は殺しあつていたあなた達が、いまは飲んで馬鹿騒ぎするほどになった。これは立派な変化でしょう？いきなり付き合ってくれと言うのではなく、少しずつ少しずつ、良好な方向にもつていけばいいんですよ』

諦めなくてもいい、何もしないよりは、少しずつ頑張ってみれば——そう、フランシスに言った俺の助言は、実は目の前にいる友人からの借りものだった。菊から言われて、一番うれしかった言葉だ。

まずはどこか特別な場所に一緒に行こうと誘つてみてはどうか、という菊の言葉に悩んだ挙句、用意したのがアレ、渡してしまつたサツカーのチケットだった。あの夜俺があいつに飲もうと声をかけたのは、そのサツカー観戦に誘う為に他ならない。

開催場所はスペインで、もし俺があいつを無事に誘い、フランシスがOKをしていたならば、あわよくば二人きりで隣国に小旅行に、なんてできすぎたプランを考えていたのだ。結局のところ、無駄な算段だったけれど。

事前に十二分に計画を吟味確認し、断られた場合の対処法からどうにかして領かせるまでのチャート表までこしらえていたというのに、のっけから鼻っ面に恋の悩みという先制攻撃を食らつた俺は、そもそも言い出すことすらできず仕舞いだったのだから、もはや笑うしかない。

現実というものはやはり甘くはないものだ。常に最悪を想定して行動をしているつもりでも、いつだってその斜め上をいく。

「その、チケットを無駄にするよりはいいかと思つてだな」「……いつそのこと、無駄にしてしまつた方が良かったのでは？」

「はは、手厳しいな」

軽く笑つて返してはみたものの、菊の額に刻まれた線は少しも薄まる気配がない。目は相変わらずひたとこちらを見据えたままで、その黒々とした深淵を思わせる瞳に俺の心まで覗かれていくような気さえた。

彼が黙るのは、言葉が必要ない時か、他に俺が続ける言葉 wait っているか、だ。今回は後者なのは分かり切つた話で、俺はもう少し目の前の友人に甘えることにした。

「でも、無駄にしないでよかったと、俺は思っている。：チケットを渡した時さ、アイツ、すげえ嬉しそうに笑つてんだ」

『メルシー！ アーサー！』

そう叫ぶように礼を述べたフランシスの顔は、まさに大輪の花が朝日に向かつて一気に綻びたような笑顔だった。

ただでさえ派手な男がいっそう煌びやかに見えるほど、嬉しくてたまらない、と顔一面に記されたその表情と言つたら！

「俺は千年以上、アイツの隣にいたけど、あんなふうに笑つた顔を見たことなんか無くてな。それで色々、気付きちまつただけだ」

そこで一旦、言葉を区切つた。

いつの間にか、喉の奥が変な緊張感でカラカラになつて

いるのが分かる。咳払いをし、庭へと開け放たれた障子から入ってくる少し水気を含んだ空気で、呼吸を整えた。

「……フランシスがさ、アントーニョを好きになったきっかけ、三か月前に奴から慰められたからだって話したろ？……もし仮に、三か月前のその時、振られたフランシスの隣にいたのがアントーニョじゃなくて俺だったら、はたしてアイツは俺のことを好きになったろうか、って」

答えは、NOだ。俺が口に出さなくても、敏い菊ならば簡単に導き出せる回答だ。菊でなくとも、俺とフランシスを知る人間ならば、誰でも。

「俺とアントーニョでは、同じ千年以上の付き合いでも、積み重ねてきたものが全然違うんだって思い知らされた。ずっと隣にいたのに、アイツがあんな風に笑うなんて、俺は知らなかったから」

アントーニョは、あの笑顔を知っているに違いない。俺と同じ隣国という立場で、時には血で血を洗う争いを繰り広げていながら、しかし結局のところフランシスの「悪友」に納まっている、太陽のように明るく朗らかなあの男は。

「長年仮想敵国だったとか、今まで何度も殺しあったとか、そんなのは関係なかったんだ。そんなものは国である以上多かれ少なかれあることだ。俺とアントーニョの差はそこじゃない。もっと根本的な……アーサー・カークランドっていう人物の性格と、それまでの行動そのものの話で」

アントーニョという男は、昔はかなり粗野だったが、今は随分丸くなった好例のような男だ。

数百年という歳月で、頼れる気質と明るさ・朗らかさをそのままに荒さが削られ、人懐っこさと大らかさがプラスされた。素直で明るく気さくなラテン男に、フランシスが惚れて仕舞うのも無理のない話だ。

そして俺と言う存在は、そんなアントーニョの人柄と対極にある。いくら紳士という仮面をかぶったところで、結局のところ昔の粗野さを捨てきれず、特にフランシスへ対しては過剰なほど暴力的なまま。素直でない態度に陰険な性格。せめて見目だけでも整っていればまだ可能性があったかもしれないが、フランシス本人からボサボサで貧相だと何度も揶揄されている体軀では、見込みなど残るはずもない。

——容姿と人格が望み薄ならば、他に残されるのは何か？

普通の人間なら財力や地位もあてはまるだろうが、あいにく俺たちにとってそれは『国』よりの情報なので、個人としてのステータスにはならない。だとすれば他には何の要素が残るのか。

俺はフランシスの笑顔を見た瞬間、愕然とした。

人の魅力を決定づける最後の鍵は、『行い』に他ならない。人柄も容姿も悪い男が、それでも他人から好かれることがあるのなら、それは過去に相手を喜ばせ惹きつけるような行動をしたかどうかだろう。どんなに世間に悪評があるうと見目が悪かろうと、自分にとって優しくったり、恩がある相手には好意を抱くものだ。

喜ぶフランスに、俺は自分が今までしてこなかった行動の重要性にようやく気付いたのだった。

「俺はフランスが喜ぶようなこと、何もできていなかったんだって。本当に今更の話だ。いや、今でさえ、フランスのために俺が何かするなんてこと、ありえないってどこか頭の中で思っている節があるくらいだ。俺の方は、アイツからたくさんのものを貰ってきたのにな」

今まで俺は、フランスから色々なものを受け取ってきた。それは菓子だとか酒だとか、そう言う物品もちろんだが、もっと曖昧な……ぬくもりとか、安らぎとか、愛情——とは言えないがそれに近い大事な何かも含まれている。例え渡した方がそうと感じていなかったとしても、だ。

だからこそ俺は、フランスという男を好きになった。敵同士になろうとも、憎み合おうとも、それと同じくらいの重さで愛しているという感情を消せなかった。たまに海を渡ってからかいにくるアイツの存在は、今も昔も変わらず俺にとって無上の喜びを伴ったままだ。

けれど、その逆は？

フランスという男にとって、アーサー・カークランドがはたして喜びを与えるような、なくてはならない存在だった時が、一時でもあったのだろうか。

そこで、ずっと俺の独白を辛抱強く聞いてくれた菊は、少し首をかしげながら口を開いた。

「アーサーさんだって、フランスさんを助けたり、贈り物を差し上げたりしていたでしょう。フランスさんだっ

て、ちゃんとそのことに感謝して、喜んでいましたよ」

「……でもそれは、全部『国』としての立場だろう？ 『フランス』が喜んだだけで、『フランス』が喜んだわけじゃない」

そう、『フランス』という国にとってならば、『イギリス』と言う国は長年の仇敵であつても、今はなくてはならない存在のはずだと、胸を張って言える。

先の大戦時だって、俺とアイツ、どちらが欠けていても勝利を収めることはできなかっただろうし、体面上とはいえ今では軍備を多く共有し合うほどの「友好国」だ。そうなる前だって、アイツを助けた事もアイツに助けられたこともある。長く積み重ねてきた歴史上ほとんどが陰悪な関係性だったのは間違いないが、なんだかんだ言ったところで今の隣国にとって英国はなくてはならない存在のはずだ。記念式典で、建国記念日で、『イギリス』という立場で贈った贈答品も数知れず、その中には『フランス』を楽しませるものもあったらう。

しかしこれが国ではなく、あくまでもパーソナリティの話になると、俺は途端に胸を張ることはできなくなる。

『フランス』にとって喜ばしいことは、『フランス』も喜ぶが、『フランス』の喜びは個人単位のもので、そこにフランス共和国は関係ない。俺に欠けていた行動とは、まさに後者だ。

そもそも個人単位での贈り物など殆んど贈ったことがなかった。何かしらの特別な日に、個人的に何か贈呈しよ

うとしたことがないわけではない。例えば建国記念日——あいつが誕生日と称するその日に、何度かそれを試みた事はのだ。けれど全てが途中でやめてしまったり、準備しても渡せなかったりで終わっている。相手が喜びそうなのが用意できなかったからだ。

フランスの好みは嫌というほど把握しているが、何分自分では用意しようがないものが多かった。ファッション関連はアイツとのセンスが違いすぎるから無駄、料理はいわずもがな、他の物品は高級だったり珍品だったり、手に入りにくいものばかりで。結局『国』の力に頼って用意してしまつては、それはもう『イギリス』の贈り物だ。俺個人として自信を持つて贈れるものなどたかが知れていて、しかしそれではアイツが心底喜ぶものは揃えられない。

それならば別のアクションで相手に何かを、と意気込んだところで社交辞令や外交ならばうまく回る口と頭も、フランス個人の前では途端に石のように硬くなり、新たな着想ができなくなる。いや、想像力はあるか。悪い想定ばかりが先行して動けなくなるような極めてネガティブなモノだから役に立たないだけで。

とにかく、『イギリス』として贈った品や交わした約束、派遣した援軍は『フランス』に心から感謝されたことがあったと信じている。けれど、『アーサー・カークランド』が『フランス・ボヌフォワ』に贈ったもので、アイツが心底喜んで俺に礼を述べた事はなかったのだ。

「けれどチケットを渡した時のあの笑顔で、俺は千年たっ

てようやくフランス・ボヌフォワって男を喜ばせることができた様な気がしたんだ。イギリスという国としてではなく、アーサー・カークランドっていう個人として、初めてアイツを少しだけ、幸福にしてやれたんじゃないかって」
俺にあの笑顔を思い出す。お得意のすました表情が崩れ目尻もだらしなく下がった——だが何よりも美しい笑顔。あの笑み崩れた顔が、陳腐な表現だが俺の心にどでかい風穴を開けていった。空洞に最初に吹き荒れたのは驚愕と悲しみ、そしてそれがおさまった後に訪れ、心の穴を急速に埋めていったのは、歓喜と欲求、決意だった。

あの笑顔をフランスに与えたのが自分であるということの喜び、あの破顔をもつと見ていたいと思う欲求、それから——。

知らず黙り込んでいた俺の前に、そつと冷たいグリーンティーが差し出された。いつの間にか、菊が入れてくれたらしい。透き通ったガラスの器に揺れる鮮やかな緑へ礼を言いながら、一気にあおる。俺の国で供される時とは違う甘さのない緑の茶は、乾ききつていた俺の喉と体をすつと冷やしてくれた。

思考も少し冷静になり、際限なくあふれ出した自嘲と分析を無理やりにまとめ、沈黙という形でそつと先を促してくれる菊へと再度向き直る。心配そうにこちらを見やる友人にこれ以上気を使わせないよう、なるだけ軽く聞こえるように口を開いた。

「俺は、フランスを応援してやりたいと思うんだ」

「……それは、フランシスさんとアントーニョさんの恋を、ということですか？」

無言で肯定の意を示すと、菊もまた沈黙で何故と尋ねてくる。

「アントーニョに比べて随分出遅れちゃったからな。今からフランシスに何かしてやったところで、多分アイツが俺に惚れることはないだろ。もう事実上振られたも同然だ。けど、少しでも好意に近づける努力は、今ならできる気がするんだ。アントーニョに惚れている今なら、アイツが喜ぶものは分かりやすいからな」

そう、今からアイツに愛してもらえよう努力しても、きつと間に合わない。他の国に比べて、俺はあまりにもマインス要素が多すぎる。それは千年間もうだうだとしていた自分のせいで、至って自業自得だ。

だから俺はこの恋の成就をあきらめる決意と、アイツの恋を手伝う決意をした。あきらめるといっても、この想いを捨てるわけではない。長年持ちすぎていてすっかりと俺の一部になってしまった感情だ、忘れられるならとつくにそうしている。

俺がした決意というものは、成就しないながらも蓋をし、少しでも近くでアイツのそばにいられるように努力をするという、そういう決意だ。

「別に打算がないわけじゃないんだぞ？ アイツの恋に協力してやれば、単純な髭のことだ、過去のことなんざ忘れて俺に好感を覚えるに決まってる。そうしてアイツとアン

トーニョがくつつけば、今度は悪友の場所が空くことになる。そこに座っちまえば、なんだかんだいって律儀なアホは、恋の橋渡しをした俺を無下に扱えない。それを口実に飲みに誘う事も、飯を作らせることだってできるだろ。そうやってずっと続いていけば、いつかアントーニョとフランシスが別れたなら、俺がアントーニョのポジションに移ることだって可能はずだ」

話しながら、口の端から乾いた笑いが漏れる。

ああ、自分で言いながらなんという気の遠くなるような話だろう。そんな都合のいいことがあるとして、それは一体何百年、何千年先だとかいうのか。詭弁もいいところだ。

アントーニョがフランシスと恋仲になるというのは、そういうことだ。アントーニョがああ溺愛しているといっても過言ではないロヴィーノではなくフランシスを相手に選ぶなら、それだけ深くフランシスを愛した結果だ。

そしてフランシスは、長く一緒にいられる優しく穏やかな恋愛を求めている。二人が一緒になれば、ひよっとすると世界が終わるその時まで、二人寄り添っているかもしれない。いや、きつとそうなるだろう。

ならば俺が自分の恋を思うなら、フランシスの恋を応援する「フリ」をしながら絶妙に邪魔をし、そうして恋に傷ついた男を優しく慰めてやればいい。それだけでも随分フランシスの心をこちらに向けることはできるだろう。

けれど俺はそうやって上手く立ち振舞ってみせると菊に言うことはできなかった。真摯に相談に乗ってくれた友

人へ、口先だけのことを言つてもばれてしまうだろう。俺がフランシスの恋を本気で成就させようとしていることを、目の前の友人は感づいたはずだ。

そもそも振られた男を優しく慰められなかったからこそ、今のこの立場だ。現状の俺では、アントーニョのようにふるまった所でアイツの好意を引き寄せることはできない。いや、少しは見直されるかもしれないが、俺が恋愛対象になるまでに何回それを繰り返し、何回フランシスは泣くことになるだろう。その陰で俺は何度心を痛めるだろう。

……それはきつと、アントーニョとフランシスの恋愛が成就して、その後別れが来るのと同じくらいの年月ではないか、そんな予感がした。それでは、誰も救われない。それならば。

「馬鹿みたいな話だが、俺はアイツの、あの笑顔がもう一度見たい。俺の手でアイツを幸せにしたいんだ。そして、今ならフランシスを幸せにできる方法が分かる。他の誰かと付き合ってる最中だったり、失恋したフランシスの喜ぶものが分からなくても、アントーニョを好きなフランシスの願う幸せなら分かるからな」

愛する人を幸せにしたいと思うのは、当然だろう？

そう笑った俺に、菊は、何も答えなかった。ただ困ったように笑うばかりで。

漂った静寂は、しばらく俺と友人の間に横たわった。それが破れたのは数分後か、あるいは数十分経っていただろうか。開け放たれた庭から、ひんやりとした風が流れた

頃だ。そちらを見やれば、いつのまにやら日が大分落ちて、空には夜の帳が瑞々しい木々の後ろから降りてきている。

そろそろ夏も終わりますね、と、ぼつりとつぶやく声に振り向けば、友人はひどく遠くの何かを見つめているようだった。俺もつられてもう一度空を見上げたが、そこには薄紫色になった空が広がっているだけだ。

星は、見えなかった。